

戦争と学校(6) 戦災の被害

第二次世界大戦は、1939年～1945年の間、ドイツ、日本、イタリアの日独伊三国同盟を中心とする枢軸国陣営と、イギリス、ソビエト連邦、アメリカ、中華民国などの連合国陣営との間で戦われた世界的規模の巨大戦争です。軍人・民間人合わせて6000万人～8000万人もの死者が出ました。太平洋戦争)は第二次世界大戦の局面の一つ(1941年～)です。主戦場は太平洋地域で、日本軍が攻めこまれて日本国内も戦場になってしまいました。工業都市尼崎には、戦前から鉄鋼や電力など重要な工業施設が多くあり、軍需生産上も重要でした。アメリカ軍は、尼崎を爆撃目標都市として位置づけ、市街地焼夷弾空襲の目標を「大阪-尼崎市街地域」として設定しました。(※焼夷弾とは、攻撃対象を焼き払うため発火性の薬剤が入った爆弾)

1945年3月～6月にかけて尼崎は4回にわたって爆撃され、武庫川河口の石油関連施設を目標とした精密爆撃、隣接する西宮の市街地を対象とした焼夷弾空襲の余波どをふくめると、B29爆撃機による空襲は計8回にのぼりました。このうち、もっとも大きな被害をもたらしたのは、6月1日と6月15日の空襲です。「(6月2日)西長洲、金楽寺(西部)全滅。旭染料、尼崎ホーロー、小西鉄工等要するに全部焼失、黒煙まだもうもうたり。防空ごうにはいりたる人は殆んど死せりと」「(6月4日)(西長洲)一ノ坪牧のとうふ屋とおぼしき附近に子供をだいたままの黒こげ死体は恐らく女性ならん。太平市場横あたりか、壕よりはいだしつつある所を直撃されしか上半身のみの見ゆるあり。惨状(ざんじょう)見るに忍びず書くに忍びず」

内田勝利「尼崎市の戦災資料補遺」(地域研究史料館『地域史研究』第2巻第3号、昭和48年2月)「松田安輝日記」より

さて、園田第三尋常小学校(現:上坂部小学校)の戦争被害はどうだったのでしょうか。第一小学校は丸焼け、第二小学校は一部損壊でしたが、第三小の建物は全く無事でした。しかし、空襲警報が出されるたびに、防空壕に避難したり、学習道具を置いたまま一斉下校したりで、落ち着いて勉強できる環境にはありませんでした。また、食料不足も深刻で、国の命令で運動場一面がイモ畑として利用され、子どもたちも農作に励みました。近くの岡崎牧場から牛糞をもらって大豆やカボチャ、イモを育て、豆かすやイモのつるを食べて何とかしのいだそうです。激しい戦火のもと、生きていくためには多くの苦労がありました。